

「新収蔵・寄託作品公開 心からのおくりもの」は、近年寄贈・寄託された高崎市や群馬県ゆかりの作家と、同時代を歩んだ作家の作品を「群馬、高崎ゆかりの作家たち」「魂の印象派 木村忠太」「鶴岡政男の素描」というテーマでご紹介する展覧会です。作家たちはそれぞれ何かにときめき、あこがれ、そしてめざめ、ゆめを抱いて人生を歩んできました。今回は木村忠太（きむら・ちゅうた 1917-1987）の「めざめとゆめ」について解説します。

### ① 木村忠太のあこがれ

今の香川県高松市に生まれた木村忠太は、友人と遊んだり学校に通うことさえできない病弱な少年でした。そんな幼心をとらえたのは絵の世界。家族に支えられ絵の道に進み、兵役を挟み画家として歩き始めます。瀬戸内の穏やかな光に包まれて育った木村は、倉敷の大原美術館で見たピエール・ボナールの絵の、絹を透かすような光にひかれ《静物》などを描きました。しかし日本でボナールのような光は描けず、夫人とともにパリに渡る決心をします。

### ② 木村忠太のめざめ

1953年パリに渡り、薄塗りを重ねる絵肌（マチエール）が、フランス絵画の光の秘密と気づき「油絵の伝統を一つ一つレンガを積み重ねる様にして」透明感ある光の描き方を学びます。1957年、戸外で制作中、絵の「中心が消え」描けなくなります。外の世界に中心はありませんから、絵の中心を探すのは木村の目。それが「消え」たのは心の変化です。基礎から油彩を学びなおし戸外で描くうち、変化する光やうつろう心に、目や筆が追いつかなくなったのです。やがて一瞬の光をとらえる印象派のタッチに注目した木村の絵に《河のある風景》の点描や《リュクサンブール公園A》の線描が現れます。《カブリ》では、初夏を思わせる黄緑や、夕暮れの残照を思わせる白がまず目に入り、それらの色と街路樹や車の輪郭線は、必ずしも一致しません。1967年からアトリエを構えた南仏《クロ・サン・ピエール》の鉛筆素描では、線が集中する黒い部分ほど、光の強い印象を表しています。1969年からはじめたパステルでも、色の線で光を描きました。南仏の光に出会い、線は物の輪郭だけでなく「光の線」に変わります。一瞬から永遠を思い描くような時のながれ、描くにつれ変化する線や色にゆだねる心……。変化こそ絵の「中心」であり木村の「魂」だったのです。一瞬の光をとらえる点を線に、さらに線を集め色を重ねて、時のながれ、心のうつろいを描くスタイルを、木村はのちに「魂の印象主義」と呼びます。「絵の中で永遠に変わらないのは真実ということ」「只真実をつかむって言うそのことです。」木村が描きたかった光とは「魂のなかに発する光だった」のです。

### ③ 木村忠太のゆめ

少年時代パステルを好み、兵役で赴いた中国でも古い書にひかれた木村にとって、自由な線は心のふるさとです。1966年リトグラフで黒い線が色の線に変わる体験をして、翌年「一番四国に似ている」と語る南仏の光に出会うと、その翌々年パステルで色の線が光の線に変わります。クロ・サン・ピエールの《風景》に描いた愛用の椅子は木村の自画像で、中央の枠はこの椅子から描くある一瞬。枠のさらに外側に、描く木村を包む自然が広がっているの、見ている私たちもその風景の中に立っているかのようです。フランスで描く日本人として、木村は東洋と西洋について考え続け、1973年「マチスやピカソたちは実在の真実をつきとめようと努力したが、ぼくはもっと自由に豊かな光の真実を追求しようと思っています」と語ります。1981年「ピカソは物質の線ですね、僕は光の線です」と語り、物を描く西洋と、魂を描く東洋が出会う「アウトラインを越える所」に進んだと宣言します。アウトライン（線）を挟んだ内と外、人と自然、心と物、東洋と西洋、個と全……。線のどちらともなく、木村は二つを行き来します。《夕日》の枠は一瞬を表すとともに、絵の外に広がる向こう側も表しています。家や木は小さく遠のくように見えます。一瞬をとらえる枠が絵そのものになるほど早く、目や筆が塗り残しもかまわず描き、ようやく心に追いついたのでしょう。《プロヴァンス》では家の影はさらに遠く、枠の外、絵の向こう側はいっそう広く、さらに自由な線、強く豊かな点、丸いかたちが交互に重なります。翌年亡くなることを想うと、最晩年の白や紫の広がりにも、彼方からこの世をのぞく距離を感じます。平らな絵に深みや隔たりを感じる心の動き。目の前の絵や世界は、それだけで完結しないという気持ちの現れでしょうか。絵にも世界にも向こう側が必ずあり、向こう側の線も、光も影も現実のものではない。それが木村の真実、魂と呼ぶ何かなのかもしれません。アウトラインを越えて内と外が一つとなる絵。その絵のさらに向こう側へ……。木村の「夢」とは、無心の彼方に見えはじめた光の現れだったののかもしれません。

「魂の印象派 木村忠太」

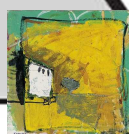
展示室のご案内

2階

《風景》



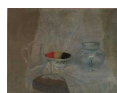
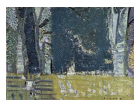
第3展示室



《夕日》《プロヴァンス》

エレベーター

《リュクサンブール公園 A》《河のある風景》《静物》



第2展示室



《クロ・サン・ピエール》

トイレ



《カブリ》